

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300096		
法人名	株式会社 TAKK		
事業所名	認知症高齢者グループホーム さくらハウス		
所在地	栃木県那須塩原市高林1931番1		
自己評価作成日	平成27年8月5日	評価結果市町村受理日	平成27年10月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	平成27年8月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

小規模多機能型事業所との併設のグループホームの為、それぞれのスペースへの出入り制限は無く自由に交流している。また、グループホームの時間の流れはゆるやかで、急かされる生活では無く、家庭的な雰囲気の中でそれぞれの方達がお互いを思いやりながら過ごせている。 ご自分の能力を発揮できる機会をつくり、得意なことや、やれる行為を継続的に出来るよう支援しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の周りには人家が少なく、近隣との交流を図ることが難しい状況だが、高林小4年生との交流や中高生のボランティアも積極的に受け入れ、会話やレクリエーションを通して認知症のお年寄りへの理解や尊敬できる先輩であることを伝え理解を促している。又、フラダンスやオカリナ・琴の演奏、蕎麦打ちなど様々な地域の方々の訪問もあり入居者の楽しみとなっている。地域の中の事業所として地域住民の安否確認に協力したり、元気なお年寄りの移動の足も確保して、事業所を集まりの場にしたいと検討している。グループホーム独自の理念「笑顔があふれる暮らし」を実現するために、職員がまず笑顔で入居者に寄り添うことを心がけることによって入居者の笑顔を引き出している。入居者の笑顔は、職員にとっても仕事のやりがいとなり生き生きと働けるきっかけにもなっている。職員は入居者それぞれがその人のペースで焦ることなく穏やかに過ごすことを大切にして日々の支援に努めている。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を 掴んでいる (参考項目:23,24,25)		1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができて いる (参考項目:9,10,19)		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 利用者の2/3くらいが			○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある			○	2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが			○	2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念の下、グループホーム独自の理念「笑顔があふれる暮らし」を共有し、入居者は勿論、私達職員自身も笑顔で過ごせるように実践している。	グループホーム独自の理念である「笑顔があふれる暮らし」を実践するために、職員はまず自分達自身が笑顔で入居者に寄り添い生き生きと働くことで、入居者自身が笑顔で穏やかに暮らすことが出来ると全職員が認識し、日々の生活の中で常にこのことを意識して支援にあたり実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小学校との交流会、中・高校生のボランティアサマー・マイチャレンジの受入れ等も実施し高齢者との交流を支援している。ボランティアの慰問、レクリエーション協会会長によるレクの実施、蕎麦打ち等は恒例行事になっている。	人家が少なく隣の家までの距離が遠いため、なかなか近隣との交流を図ることが難しい状況にあるが、高林小4年生との交流会やボランティアサマースクール、マイチャレンジでの中高生との交流、フラダンスや蕎麦打ちなど様々な地域の人達の訪問があり入居者の楽しみとなっている。地区の高齢者の安否確認や事業所にお茶に誘うなど、今後地域の中の事業所として出来ることを検討しているところである。	地域に開かれた事業所として出来ることを模索し、今後地域の中で存在感のある事業所に発展していくことを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校との交流会や、中・高校生ボランティアサマー等で、認知症を有していても会話やレクを楽しめたり、昔の知恵を教わることができ、尊敬する大先輩であることを伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族の出席は少ない状況は続いているが、民生委員の出席率は高く、事業所への理解も深まっている。また、今年度より、毎回自治会長の出席もあり、地域での必要性等も話せる機会となっている。	運営推進会議は自治会長や地区の民生委員が積極的に参加し、事業実施状況の説明と毎回いろいろなテーマを決めて話し合いが行われている。参加者の中にはまだ施設や認知症についての理解が足りない人もいるが、説明をつくして理解してもらえるよう努力している。自治会長や民生委員、地域包括支援センターと連携し、施設だからこそ出来る地域での役割を果たしていきたいと考えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村との連携は図れている。事故等や事業所内のトラブルに関しても速やかに報告し指示を仰いでいる。	普段から市の担当課と連絡を取り連携を図っている。また、運営推進会議には毎回市の担当職員の出席があり、新しい情報などを提供してもらいアドバイスを受けている。市からの紹介で入居した人の今後のケアのあり方について社会福祉課保護係に課題を伝えているが、なかなか返答が得られないため今後も継続して働きかけを行っていく予定である。	現状を市の関係課に積極的に情報提供し、情報を共有できる関係を築きながら今後も問題解決に向けて取り組んでいって欲しい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をすることは無い。職員が手薄になる時間帯には「ちょっと待ってて。」等の制止をしてしまう。スピーチロックを減らす為、日勤の時間帯を変更し職員が手薄になる時間帯を補う工夫をしている。	職員は月1回の勉強会等において、身体拘束をしないケアについて学び支援に活かしている。日中は玄関の施錠はしておらず、散歩に行きたい入居者には職員が付き添い事業所の回りを1周するなどして対応している。ベッドから転落の危険のある入居者には、ベッド柵で囲う事をせず、ベッドを低床にし、さらにベッド下に布団を敷き、万が一ずり落ちても怪我の無いようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待マニュアルを参考に定期的な勉強会の中で取り上げている。入居者の全身状態の観察を行いあざ等の確認と、精神状態の変化を見過ごさないよう職員間の連携を図っている。職員の精神的な変化にも気づけるよう、個別面談等も行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進会議の議題に取り上げたり、勉強会の中で学ぶ機会を設けている。今後も継続的に学習していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明を行い不安等への対応も行っている。入居してから新たに出てきた疑問点に関してもその都度対応できるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議への家族の参加は少なく、運営に関する意見を聞ける状況に無い。面会時に状況報告をするのみとなっている。具体的な出来事が起こった時点で相談しながら対応しているが、直接運営に反映できていない。	運営推進会議への参加を家族に呼びかけてはいるが、家族の参加はなかなか得られない状況にある。会議で話合われた内容は「さくらハウス便り」で知らせており、通院の時や面会時等に入居者の状況を家族に説明し、家族の希望や要望等を聞き取る機会としている。しかし、家族から運営に関する意見や要望等が伝えられることはほとんどない。	運営推進会議への参加を引き続き呼び掛けるとともに、併設の小規模多機能事業所で行ったような家族アンケートの実施も検討し、家族の意見や要望を聞き取る機会を増やして、それらを運営に反映していって欲しい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度行っている勉強会に管理者も出席し職員との意見交換を行っている。ケアに関することや業務に関することを話し合える場となっている。	職員の提案で日勤の時間帯を見直し、手薄になる夕方の時間帯を2人体制にした。入居者関係の連絡ノートの他に、職員が問題点や疑問点、それに対する改善案やアイデア等を自由に書き込める職員用のノートを作り、いろいろな意見や提案を吸い上げてケアに活かしたいと考え、このノートの使用を始めたところである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別面談の機会を設け意向の確認をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修受講に関して前向きに検討し、働きながら職員同士での学びの機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同法人の別事業所との交流を持てるようにしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人の好みや不快に思うことを確認し過ごしやすくてできる工夫を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の困りごとや不安に関して傾聴し、要望に関してもできる限り対応できるように心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族のニーズを見極め対応できるように努力している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者それぞれの体力や能力の差はあるが、その方ができることは継続できるよ、集団生活では無く共同生活を送れるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族が来所時には日頃の様子を報告し、毎月の行事等での様子をスナップ写真と共に文書にして送付しご本人の状況を把握して頂けるようにしている。また、遠方の家族へ、一人では難しくなってきた手紙の文章も職員が言葉を引き出すことで想いを伝えることができている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	可能な限り、通院はご家族で行って頂くことでご本人の状態を把握し支える関係の共有を図っている。併設している小規模多機能型施設への行き来もでき、以前の知り合いとも交流できるようにしている。また、ご家族との外出や居室での談話も可能となっている。	併設している小規模多機能事業所の馴染みの利用者との交流があり、離れた家族に手紙を書くことで親子関係をつないだりして、関係性が途切れないよう支援している。また入居者の家族が蕎麦打ち名人であることから毎年年度末に蕎麦打ちに来てもらったり、高林小との交流会では入居者の曾孫が訪れるなど、このような機会も馴染みの関係継続の支援となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	その時々状況に合わせ、入居者同士で和やかに会話ができたり、職員が間に入ることでスムーズに関わっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時や他施設への入居当初はご家族の不安もある為随時相談等の対応を行う。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分で出来ることは継続できるように見守りや声かけで支援している。ホールのモップ掛けや玄関掃除、食器洗い、洗濯物たたみなど、出来る喜びを感じられるよう工夫している。	入浴時はゆったりとした雰囲気の中で入居者と1対1になるため、職員はこの時間を利用し希望や意向を聞き取る機会としている。アルコールの好きな人に行事の時にノンアルコールビールを提供して喜んでもらったり、花の好きな人には散歩に出た時に摘んだ花と一緒に押し花を作る等し、本人の意向をくみ取り対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族やご本人から、生活歴や今までの環境、趣味等の情報を得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別ケアを中心に、一人ひとりの1日の流れを把握し、心身状況及び精神状況の変化にも対応できるよう現状の把握に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の申し送りや勉強会等で、現状や困難事項について話し合い、意見を出し合うことで統一したケアに繋げている。	介護計画は日々の職員からの情報と、入居者の担当になっている職員が本人から聞き取った希望等を取り入れ、計画作成担当者が、ケアマネジャーの資格を持つ管理者の指導のもとで作成している。モニタリングを全職員で実施し、介護計画に反映させていきたいと考えているが、まだ全職員で関わっていないところがあり引き続き今後の課題としている。	職員が入居者の課題やケアのあり方について意見やアイデア等を出し合う職員用ノート等も有効に活用しながら、職員全員でアセスメントやモニタリングに関わり、より良い介護計画が作成されることを期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送りノートを活用し職員間での情報共有はできている。また、改善すべき内容等に関しても、それぞれが意見を出し合い決定できるよう、新たなノートを活用しケアに活かせるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズや状態の変化に伴い、他施設への検討や、医療との連携も図れるよう、往診の依頼も等も行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の小学校との交流会や、ボランティアの慰問、蕎麦打ち等を実施し、消防等の指導を受け応急処置やAEDの使用法の講習等で安全な暮らしの継続に繋げている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の協力も得ながらかかりつけ医への受診を行っている。細かい情報が必要な場合には、日々のバイタル状況や排泄・水分状況等を記入し主治医へ渡してもらっている。また、通院が難しくなってしまった方には往診の依頼もしている。	入居者はそれぞれ以前からのかかりつけ医を受診している。家族にも一緒に入居者を支えているという実感を持ってもらいたいと、通院は基本的に家族にお願いしている。職員は家族を通じて主治医からの情報をもらい申し送りノートで情報を共有している。通院が負担になってきた高齢の入居者は法人の関連医院であるかかりつけ医の往診をお願いしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師も介護職として共に業務に従事している中で、医療的な支援の必要性について相談し適切な判断を下している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院関係者との情報交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りに関してはまだ完璧に行える状況ではないことを伝えている。ご家族の意向を確認し、医療的な処置が必要な場合には病院での治療をすすめている。急変時には家族へ連絡し意向を確認する。	以前に事業所で看取りをした経験を生かしたいと考えたが、正看護師の配置がない現状では看取りは困難であると入所時に説明している。重度化した場合はまず医療機関を勧めるが、家族の意向も優先したいと考えており、事業所で看取りをしてほしいとの要望があった場合は受け入れる覚悟でいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制は整えている。入居者の状態を把握し急変時の対応ができるよう、情報の共有を行い急変時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を行っている。非常口から全入居者を駐車場へ避難させ、避難させる優先順位や職員に代わり見守りを頼める入居者も想定し実施した。併設の小規模職員へもGHの入居者の状態や居室と名前の把握をしてもらう等促している。	年2回の訓練のうち1回は消防署員立ち合いで行っているが、地元の消防団や地域の人との連携体制はとれていない。出火場所によっては居室の腰高の窓や階段のある非常口からも避難しなければならないことや入居者の誘導順など課題は多いと考えている。災害時用に水、卓上コンロ、湯たんぽ、石油ストーブを備蓄しているが、劣化し易い灯油の備蓄が課題になっている。	運営推進会議には自治会長や民生委員も出席しており、いろいろな課題について相談しやすい関係作りができている。災害対策についても議題にあげて、地元の消防団や住民の方との避難訓練を実現し地域との協力体制を築いていって欲しい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご本人が不快な思いをしないで過ごせるように心がけている。排泄への声かけにも気をつけ、訴え時には直ぐに対応できるようにしている。排泄物も直接目に触れないようエコバック等に入れて処理する等の工夫をしている。	入居者の呼び方は一律でなく、呼ばれたときの入居者の表情や反応をみて職員それぞれが決めているが、家族の気持ちを考えて馴れ馴れしくなりすぎないように気をつけている。小・中・高校生との交流では、入居者との会話を体験することを通して認知症のお年寄りも尊敬できる先輩であることを知り、認知症について理解してもらえるよう努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の思いや希望を表現し易いように、傾聴しながら言葉を引き出せるよう寄り添っている。失語がある方でも、こちらから誘導するのではなく、選択できるような言葉かけを行い思いを表現できるよう心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、起床時間や就寝時間、排泄の決まりも無く過ごして頂いているが、制止の効かない入居者が優先になり、待つ頂く方も居て職員側の都合を優先してしまうこともある。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの服を選んで着たり、2ヶ月に1度は、施設に来てくれる理美容の方に散髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材会社から福祉食の食材が届き職員が調理している。入居者と一緒に調理はできていないが、一緒に食事し、配膳や後片付けを行っている。好みの弁当を頼んだり、行事の時にはノンアルコールビールやお寿司を楽しんでいる。外出時にはカフェで3時のおやつを楽しんでいる。	入居者と職員と一緒に食事をし、手伝える人はテーブルを拭いたり、職員が洗った食器を濯いだり拭いたりしている。飲み込みがうまくできない入居者には、とろみをつけて食事がきちんと摂れるよう支援している。なかなか食事の進まない入居者に他の入居者が「おいしいから一口食べてごらん」と声をかけていた。職員の自宅の畑で季節の野菜を収穫して食べたり、手作りのおやつを作る等、楽しく食べることを積極的に支援したいと努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに適した量を配膳し、栄養バランスも考慮した献立になっている。摂取量や水分量のチェックも行い管理している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	拒否や抵抗がある場合は無理強いせず、出来る限り毎食後口腔ケアを行い、義歯の状態や口腔内の状況を確認している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定時排泄では無く、一人ひとりの排泄パターンを見極めトイレでの排泄が、ほぼ可能となっている。	排泄チェック表をつけ、介助の必要な入居者には一人ひとりのパターンでトイレに誘導しているが、夜間は睡眠を優先させオムツにしている。退院後足の筋力が低下した入居者に対し、トイレで排泄が出来る様介護計画を立て自立に向け支援したケースもある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取や適度な運動、必要時には便秘薬を使用し排便を促している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午後に入浴の時間を設け、一人の職員が準備、誘導、入浴、着脱まで行い、その方に合った時間配分で支援している。一対一で関われる時間でもあり、普段は話しにくい会話も楽しめている。	入居者は一日おきに一人ずつ入浴している。介助する職員と1対1になれるので、安心してうち解けて語る入居者の話を職員は傾聴している。歌が出ることもあり、ゆったりと入浴を楽しんでいるが、長湯にならないように気をつけている。自分で洗身洗髪ができる入居者には安全を確認しながら少し離れて見守っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	部屋の温度や明るさの調整を行い、いつでも自分の居室でのんびり過ごせるように心がけている。それぞれの睡眠状態や体調に応じて、休息や睡眠をとれるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬事情報を確認し、看護師の指導の下全職員が把握に努めている。服薬の準備も全職員が責任を持ち準備し、症状の変化等への観察も行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除、食器洗い、食器拭き、テーブル拭き、洗濯物たたみ等、それぞれに合った役割を作り行ってもらっている。入居者だけで行えるババ抜きを楽しんだり、職員との遊んだり談笑、読書等も気分転換になっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節毎の外出の他、月に一度は外出出来るように計画を立てている。天気の良い日には、思い立ってドライブに出かける時もある。天候に合わせ、戸外の散歩をできるようにしている。	気候の良い時は午前や午後に事業所の敷地内を散歩している。初詣、花や紅葉、イルミネーション見物など季節を感じられる外出を毎月行っている。スーパーやカフェに行くお楽しみの外出もあり、法人から借りられる車の大きさにより全員で出かけたり、2回に分けて出かけたりする。外出先で犬好きの入居者が犬とふれあうことができ喜ばれている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は施設で行っている。本人には現金は渡していない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ハガキや手紙を書ける方には家族への手紙をすすめている。住所の記入や切手を貼る手伝いは行っている。電話も希望時には対応している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のホールからは、プランターに植えられた花々や訪れる鳥達の姿や鳴き声を感じられる。テーブルや席の配置にも配慮し、塗り絵や歌を楽しめたり、隣の和室では、ソファーに座りテレビや新聞を見る入居者も居る。	ホールからはプランターに植えられた季節の花や野菜、敷地周りのフェンス沿いに植えられた向日葵が見える。入居者はホール中央のテーブルに集いぬりえをしたり歌をうたったりおしゃべりをしたりしている。天窓には夏場は陽射しよけのために幕を張っているが、白黒2枚の幕を2段に張って室内が暗くならないよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自由に席を移動できるので、数人で集まりトランプやゲームを楽しむ事もでき、和室に置いてあるソファーに座りテレビを楽しむ事もできる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、以前使用していた家具や使い慣れている物を持参して欲しい旨伝えている。家族の写真を飾ったり、ぬいぐるみを飼った犬の代わりだとベッドに置いている方も居る。手作りのカレンダーを壁に貼ったり、自分で仕上げた塗り絵を閉じて大切に保管している方も居る。	各居室のドアの真ん中に入居者の名前が女性には赤、男性は青のプレートに書いてあり、目の不自由な方には目印に大きなくす玉も下げている。家具寝具は各自持参し、季節毎の衣類の入れ替えは家族や職員と行い、居室の掃除も職員と一緒にしている。壁に模造紙が貼ってあり、そこに自作のカレンダーやぬりえ等入居者の作品をまとめて掲示している。乾燥する季節には濡れたタオルを各居室に干して湿度調整をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示や居室のドアにネームをつけて分かりやすくしている。目の不自由な方には、自分の居室だと分かりやすいように大きな飾りをつけている。		